
メモリアルヌードル

小笠原留守

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メモリアルヌードル

【Zマーク】

Z4083H

【作者名】

小笠原留守

【あらすじ】

結婚式の一次会の景品はカップ焼きそばだった。カップ焼きそばにまつわる思い出が、僕をあの日へといざなう。

結婚式の一次会の景品はカップ焼きそばだった。

恒例のビンゴ大会、何等だつたか最後の包みを僕が引いた。

そして、このカップ焼きそばがここにある。

そういえばいつの間にか買わなくなつた。

最後に買ったのはいつだらう、学生の時だつたのうか、思い出せない。

午後1時25分

まだ寝るには早い気がしたし、少々おなかもすいていた。

友達の結婚式には思いのほか知っている顔が少なかつた。いや、少なくはなかつた、ただみんな妻帯だつたから、ちょっと遠い気がしただけだ。

つまり仲間内で独身者の出席者は僕だけだった。

まあ、わかつてはいたが、何ともさみしいものだ。みんな「冗談とも本気とも取れない言い方で僕に結婚をすすめた。

あまり話すこともなくなつた、そしてビンゴ大会の最後の包みが当たつて一言

「残り物には福があるついでいきますよな。うれしいです。」

お湯が沸いた。

カップ焼きそばにお湯を入れる。

お湯がわくまでにとつけたFMからはシカゴの『素直になれなくて』
が流れていた。

彼女はシカゴが好きだった。

僕の車には、たぶんどこかにまだシカゴのじりがねむつているはず。

そういえば

スタンドで給油をした時の景品がカップ焼きそばだった。

部屋に戻ると彼女はカップ焼きそばを作りたいと言つ出した。

お湯を沸かして、三分後

「ねえ、今のおとはどうするの？」

「お湯を切るの? 危ないからかしてみな」

カップ焼きそばのお湯を切ると、濁つたお湯が流れ出した

「あれ、もしかしてソースも入れてしまつたのかい?」

「えつだつて全部入れてお湯を入れるものだと思つたわ

彼女は驚いた表情で僕を見つめた。

僕は笑いながら、彼女を抱きしめ、そしてキスをした。

夏の昼下がり

ソースの香り

そして今

BGMにシカゴが流れる部屋

しあれた生花の「サージュ

カップ焼きそばのソースの香り

「僕は間違えるわけがないんだな」

お湯を切り、ソースをまぶした

「会つてみるか」

二次会の席で、彼女がこの街に帰ってきたことをきいた。

やり直すとかやり直さないと

それはその時でいい

もうひとつ昔に消去したテレフォンナンバー

そして消えることのないメモリー

最後の番号を押す

あとは電話の主が誰か、それだけだ

ワンゴール、ツーゴール、

午前十一時

電話に出たのは魔法が解けてこの街に帰ってきたシンデレラだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4083h/>

メモリアルヌードル

2010年10月20日13時10分発行